

満願の湯

新田 由紀子

秩父長瀬の奥に「満願の湯」という温泉がある。登山の帰りなどに立ち寄る湯量豊富な日帰り湯だ。この秋は「秩父三十四観音札所巡礼」を満了して、文字通り、満願・結願の湯を感慨深く堪能した。

巡礼を思い立ったのは一昨年冬の冬のこと。秩父夜祭の時に立ち寄った寺で、線香の煙に促されるように観音巡りを志した。鄙びた秩父の里をあちこち巡り歩くのは興味深い。何よりも、観音堂の御前で般若心経を唱えるのだから、亡き父母や兄たちの供養になる。以来二年間延べ十二日、西武・東武線と秩父鉄道を乗り分け、バスの時刻表片手に歩き回った。

その十二月中には、神門寺、定林寺、野坂寺、大慈寺、常楽寺、西光寺、今宮坊、慈眼寺、少林寺、龍石寺、岩之上堂、観音寺、童子堂、音楽寺、橋立堂、大淵寺、円融寺の十七ヶ寺を巡る。市内の地元グルメも思い出深い。翌年は、四萬部寺、真福寺、常泉寺、金昌寺、語歌堂、西善寺、卜雲寺、法長寺、明智寺、長泉院、久昌寺、法泉寺の十二ヶ寺。山沿いの四季の風景も楽しんだ。残るのは交通不便な札所ばかり。令和一年は菊水寺、法性寺、観音院の三ヶ寺のみを、巡礼マップと首っ引きで歩いた。翌年二月には蠟梅香る法雲寺で武甲山への道筋を懐かしんだ。

そして、迎えた満願の日。三十四番は水潜寺という。コロナ禍が一段落した秋日和を選び、秩父鉄道皆野駅からバスに乗る。寺で満願の御朱印を受けたら、かねての計画通り裏山に登るのだ。水潜寺はその名の通り水気が多く、背後の崖や鍾乳洞から滴る水で、じつとりと鎮まっていた。満願の証に、崖の岩屋で身を清め、胎内くぐりをして俗界に戻るといふ禊があるのだが、中止になっていて意気消沈。

早々に寺の裏手から登山を開始。秩父盆地の望楼という破風山(六二七㍎)に登る。快晴の頂上から縦横に歩き回った盆地を一望すると、やっと達成感がこみあげてきた。麓には満願の湯が待っている。晴れ晴れと天空から下る道はさながら Victory road だった。